



2008.9.28

152

編集 樋口 みな子

E-mail  
minginga@agate.  
plala.or.jp  
郵便振替  
「銀河通信」  
02740-7-56535  
(6号分1,000円)

## 秋の日に草木が照り映えて

9月になっても暑い日が続きましたが、ここ一週間で秋風が冷たく足早に冬が近づいているようです。9月24日には大雪山系の旭岳で初冠雪のニュースがありました。9月初旬に登った羊蹄山も早、雪が降ったそうです。

我が家のリンゴ。枝が折れそうなくらいたわわに実りました。17年間も我が家の歴史を見つめてきたナナカマドと、リンゴの木。近所に住む母から再三「隣の家まで被さっては迷惑だから」と言われ、仕方なく業者さんに頼んで枝払いを行いました。右の写真は惜別の思いをこめて撮った写真です。今は後悔の思いと寂しさでいっぱいです。ほんの少し伐るだけかと思っていたら、容赦なくバッサリ！「また緑豊かな木になってね」と心の中で祈っています。



たわわに実った我が家のリンゴ



9.26 札幌岳と空沼岳の縦走路で見た虹



オオカメノキ

久しぶりに野幌森林公園を散歩しました。コウライテンナンショウやオオカメノキの実が真っ赤に色づき、ミゾソバのピンクが天に向かって可憐に咲いていました。秋の日に照り映えている草木の紅葉を照葉というそうです。私もそんな草花に染まってしまうそうでした。自然の営みをゆっくり楽しむのもいいもんだなと思いながら歩きました。

銀河通信も最近マンネリでしょうか？読者の反応も少なくなりちょっと落ち込んでいたときに初めて読んだという方からメールでお便りを頂いたのが嬉しかったです。別ページでご紹介します。

自分で言い出すのも変ですが、20周年を祝って読者の集いがやれたらいいなと思っています。会うことでまた、新たなつながりが生まれるのではないのでしょうか？編集へのご意見も伺いたいです。



秋を彩るミゾソバ

# みな子の山旅日記

## ニペソツ山 ( 2012 . 7 m )

8月16日、登山口でテント泊し17日にニペソツ山に6人で登りました。今回も杉沢コースです。お盆で登山者は少なく静かな登山を楽しめました。

5時登山口出発。最初のピーク、小天狗までは暗い針葉樹林帯を進みます。ここまでが一番長く感じました。前天狗が見えだし、すぐに小天狗近くの岩場を乗り越えました。前はここが難所でしたが今回は苦にならなかったです。また見通しの悪いミヤマハシノキとハイマツのトンネルをくぐると一気に展望が開けました。



8.17 快晴のニペソツ山をバックに



前天狗のトラバースではナキウサギが、間近でキチキチと鳴き可愛い姿も何度もみることができ楽しかったです。

前天狗岳からは360度の眺望。お花の見頃は過ぎていましたがオヤマノリドウやウメバチソウが咲いていました。ニペソツ山とのコルへは細い稜線を下ります。



ここから鋭く切れ落ちた斜面を登ります。はるか遠くに見えましたが登ってみるとあっという間でした。

頂上からの眺望が圧巻。富良野岳～十勝岳～オプタテシケ山～トムラウシ山～旭岳～北鎮岳などが連なり、登りがいのある山に感激もひとしおでした。

ここでランチタイム。メンバーのうち4人が初めて登る山で、その喜びを一緒に味わえたのも嬉しかったです。

名残を惜しみながらニペソツ山を後にしました。3度の登り返しがきつく下りが予想外に長く感じました。3時40分、登山口に到着し厳しい登山を終えました。

登山口 5 : 00 天狗のコル 7 : 00 前天狗 8 : 30 頂上直下 9 : 35 頂上 10 : 45 頂上出発 11 : 20 登山口 15 : 40

## 羊蹄山 ( 1898 m )

羊蹄山は見る山だと思ってました。春スキーで9合目まで行ったことがあります。今まで登る機会がありませんでした。

9月2日、友人に誘われて真狩コースから登りました。最初から急なつづら折りの山道を行きます。ひたすら歩を進めました。4合目まで休まず1時間で。明瞭な標識があるのでそれを励みに登ります。天気が良くないので、まさに鍛錬の山でした。9合目から紅葉が始まっていました。行きかう登山者は単独や、カップルが多かったです。友人二人は3時間40分で頂上に着いたとか。下山してきたので私は9合半までの到達でした。残念ながら優美な羊蹄山は臨めませんでした。





## 手稲山 ( 1 0 2 3 . 7 m )

9月14日、山のトイレデーは手稲山で啓発活動を仲俣さん、宮野さんと3人で行いました。この活動は山のトイレを考える会が主催して毎年全道各地の山で実施しています。

私たちは平和の滝コースから登り始めました。駐車場は9時ですでに満杯。「使用済みのペーパーは持ち帰りましょう」とパンフレットと、マナー袋、各地の登山口のトイレ情報などを登山者に声をかけながら渡しました。



撮影 仲俣善雄さん

反響は良く「携帯トイレ持ち歩いてますよ」とか「手稲山の頂上近くに以前はスキー場のトイレがあったのに今は無くなってとても不便」「登山口のトイレ情報はありがたい」等の意見が寄せられました。

秋晴れの登山日和で、100部のマナー袋などは足りないくらいでした。

左の写真は「山のトイレを考える会」が作った「使用済みのペーパーは持ち帰りましょう！」とプリントされたTシャツを着てのPRです。出かけるとき、さすがに電車にこのTシャツで乗るには抵抗があり、カッターシャツを上羽織って出かけました。一目瞭然で効果は抜群！でした。

## 風不死岳 ( 1 1 0 2 . 5 m )

9月21日、某登山教室の皆さんと風不死岳に登りました。樽前山7合目ヒュッテ前の駐車場は満杯。登山口を9時に出発。

急な鎖場を乗り越えると、樽前山のドームが空の上にはぼっかりと見えます。風不死岳は雲の中でしたがメンバーの足並みも良く頂上には11時40分に到着。

頂上は、こんなに人がいるのは初めてという位たくさんの登山者でにぎわってました。頂上からは支笏湖を囲んで徳舜警山とホロホロ山が優美な山容を見せてくれました。

私たちは北尾根コースを縦走するので、少し下りた所でランチタイム。このコースは8月の始めに、登りが下りに利用するか下見しています。かなり急斜面の



8月8日北尾根コースから見た支笏湖と紋別岳

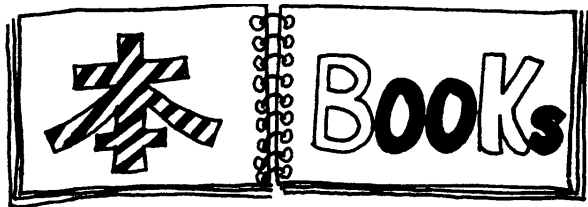
登りがきついで今回は下山に利用しました。

とにかく一度も平らな所がないとあっていいほどです。鎖場も数カ所ありましたが、私は赤岩でクライミングの訓練？をした効果があったのか、あまり苦労せずに下山できました。樹海から眺める樽前山と支笏湖のコントラストが素晴らしかったです。

樹齢1000年を越える大木が、数年前の台風にもめげずに堂々たる風格で立っている姿には感動しました。

6合目まで下りると、後はトントン下りるだけ。14時。1時間半で北尾根登山口に到着。紅葉にはまだ早かったです。





## 「アンのゆりかご」村岡花子の生涯

村岡恵理著 マガジンハウス 1900円+税



今年モンゴメリ原作「赤毛のアン」誕生100周年だそうです。本書は「赤毛のアン」を始め多くの英米児童文学を翻訳した村岡花子さんの生涯を孫の村岡恵理さんがまとめました。

私も中学時代、夢中で読みました。孤児のアンがつらいことがあってもくじけずに成長していく物語で躍動感のある文章に引き込まれました。

村岡花子(以下敬称略)は8人兄弟の長女として山梨県の甲府に生まれます。父は茶商人でしたが、熱心なクリスチャンだった縁で、成績も良かった花子は東京・麻布のミッションスクール、東洋英和女学校に10歳で編入学し、10年間寄宿舎生活を送ります。「赤毛のアン」の作者モンゴメリと同世代のカナダ人宣教師たちから英語や生活習慣を学ぶのです。明治生まれの女性が高等教育を受けることが出来たのは、資産家や特権階級

の家柄ばかりだったという時代、父の先見の明には驚かされます。家族は貧しく、姉妹の多くは教育を受けられなかったことにずっと痛みを感じていたようです。15歳にして図書室中の原書を読破したといひます。ディケンズやテニスの原書を読み、英語力を身につけるのです。学友の伯爵令嬢、柳原白連との友情や、女流文学者の吉屋信子、林芙美子、宇野千代、石井桃子、市川房枝など多彩な人たちとの出会いが花子の人生に影響を与えます。写真も豊富でその時代の自由闊達な臨場感が伝わってきます。

大恋愛の末に結婚した花子は6歳の一人息子を病気で亡くし、マーク・トウェーインの「王子と乞食」を読み日本中の子供たちのために、家庭小説を翻訳することを決意します。

第二次世界大戦が始まり、友人のカナダ人宣教師のミス・シローから「赤毛のアン」の原書を贈られます。戦火の中で花子は翻訳を続けるのです。戦後1952年「赤毛のアン」を発刊。自由と平和を求める読者の共感を得ました。アンは希望の象徴でした。花子はアンの人生に自分の人生を重ねていたのではないのでしょうか? 逆境に負けないひたむきさは、アンその人に思えました。躍動感のある翻訳は、英語力だけでなくカナダ人を身近に育った環境も大きかったと思います。

戦後は女性と子供たちのために日本で初の家庭文庫を作ります。

評伝を書いた孫の恵理さんの祖母に注ぐ敬愛のまなざしが温かい。

今も読み継がれる「赤毛のアン」シリーズ。村岡花子が情熱を注いだ翻訳のことを知って「赤毛のアン」がより身近になりました。

## 「アンの娘リラ」モンゴメリ著 村岡花子訳 新潮文庫 743円+税

「赤毛のアン」シリーズ最後の本です。「アンのゆりかご」でも紹介されていました。

末娘リラの視線で、第一次世界大戦中のプリンス・エドワード島の生活が描かれます。アンとリラは島で銃後の生活を守りながら戦地に赴いた息子たち、リラにとっては兄たちの無事をひたすら願います。兄弟の中でも特に母親譲りの詩心を持った次男ウォルターがフランスで戦死したとの知らせを受けます。

リラは戦争孤児を引き取って育て、少女から女性に成長していきます。幼なじみの青年へのひたむきな恋も描かれています。

この物語はアンやリラの深い悲しみを通してモンゴメリの平和への願いが伝わってきます。

訳者の村岡花子は、第二次世界大戦で世界中の母や、姉妹たちの悲しみを思い、戦争反対の意志を込めて翻訳したといひます。大人にも勧めたい一冊です。





## 「言魂」 石牟礼道子、多田富雄著 藤原書店 2200円+税

文明の病としての水俣病を鎮魂の文学として描き出した「苦海浄土」の作者である石牟礼道子さんと免疫学の権威者として世界的にも有名な多田富雄さんとの往復書簡集です。

多田さんは2001年に脳梗塞に倒れ、右半身麻痺があり、その後遺症で構音障害、えん下障害もあります。さらに前立腺がんにも冒されます。多田さんは国の医療改悪に怒り、行動します。「日常とは本能的な死との戦いです」と言い「苦しみが日常になっているから、もうそれに耐えることも日常になったのです」。そんな自分を見つめる「極限の私」である多田さんは障害者の一人として、医師や患者と一緒に反対の署名を集め厚生労働省に乗り込むのです。石牟礼さんへの手紙に「リハビリ打ち切りの改定には単に弱者、障害者を医療から切り捨てるという政策以外に何かもっとまがまがしいものが含まれている。その黒い正体がすくくと空に向かって立ち上がったように思った」。石牟礼さんは「モノとカネが生命より価値ありとされる社会で、弱者が大量に投棄される。これが単なる比喩でないことは、この水俣が「IWD東亜熊本」なるゴミ処理会社に狙われて産業廃棄物最終処理場にされようとしている。あまりに非人間的発想ではありませんか。50年以上も受難にあっている水俣を、まだ踏みつけにし、息の根を止めるつもりでしょうか」と書きます。



多田さんが渾身の力を振り絞って作り上げた新作能「一石仙人」を石牟礼さんに伝える描写は私もその場に居合わせているかのような錯覚を覚えるほど、生き生きとして、臨場感がありました。この成功は多田さんにも奇跡をもたらします。がんが縮小し、自然排尿も出来るようになったというのですから、生きようとする意志の強さに圧倒されました。

石牟礼さんの文学は水俣の言葉の豊かさが素晴らしいです。心を聴き取る感性は、子供の頃から心を病んだ祖母の姿を見て育ったからでしょうか？苦海浄土では水俣病の実相が語られますがその人たちと一緒に悲しみ、苦しむ石牟礼さんがそばにいます。多田さんは石牟礼文学に流れているのは姉性であると書いています。私も同感です。

石牟礼さんの言葉と多田さんの言葉が共鳴しあって発信する「言魂」の数々は生と死、生命と魂、苦しみと喜びなど重いけれど、温かく心に響きました。

「言葉のなかった長い世紀のゆたかな沈黙、たくわえられていたあらゆる天性とゆたかな感受性を思います。人間たちの表情は、今よりもふかぶかとしていたのではないのでしょうか」。という石牟礼さんの言葉にはっとさせられたのは私だけではないでしょう。

30年前、私がまだ独身で大学病院で働きながら、ユージン・スミスの「水俣」写真展を企画し奔走した頃を思い出しました。たぶん当時50歳くらいだった石牟礼さんが3月の雪解けの頃に旭川にいらして下さり、ドキドキしながらお話したことが懐かしいです。雪のイメージを詩のような言葉で表現されました。



## 「十五少年漂流記」への旅 椎名 誠著 新潮選書 1000円+税

著者が子供の頃、何度も読んできた冒険小説の舞台になった島は本当にマゼラン海峡にあるのだろうか？という疑問から南米、ニュージーランドにと旅し十五少年の追体験をします。きっかけは大学教授が書いた、漂流したのはニュージーランドのチャタム島ではないかという論文でした。

旅の最後に、ニュージーランドの小さなチャタム島に立った時の著者の驚きが楽しい。「この島はまさしく百年前に、ジュール・ヴェルヌが地図だけを見て想像力だけで描いたあの物語の地なのだ、というかなり特殊な感慨を実感した」とあります。

作家とは一枚の地図から物語を作れるのか？と私も驚きました。

私が子どもの頃は、近くに森や川があり、小さな冒険ごっこは自然を知るいい機会でした。今は近くに森がないし、あったとしても物騒な時代です。野遊びを安心して出来ないのは寂しいですね。

「知らない世界を目の前にしたとき、価値観は変わり、それら未知のものに対応していくたびに思考が広がり、深くなっていく」という著者。私も著者のようにそんな感性をいつまでも失いたくないと思います。

# お便り

銀河通信も長くなると、このままの編集でいいのだろうかと悩みます。読者からのお便りに励まされ続けてこられたような気がします。ありがとうございます。

(みな子)

とにかく素晴らしい内容の通信ですね。私も山・写真は好きで色々歩きました。N0151号に掲載のトムラウシは40年前に初めて登り都合3回ほど堪能させて貰いました。貴女の文章は内容が句で分りやすく写真もとても美しいです。それにも増して驚いたのは

(感動したのは)20年間も継続して この通信を出し続けているということです。何事でもスタートは簡単です。3回5回、1年2年は続けられますが5年10年は難しいものです。増して20年間!!しかも2ヶ月に1回発行し続けるのは至難の業と私は感じっています。さらに映画も本もこれだけの紹介文章をお書きになるには豊富な知識と感動する力・感性を持っていないと出来な仕事です。単に好きとか努力だけでは続けられるものではないと思います。

すばらしい感性と継続の尊さを実践されている樋口みな子さまに敬意を表させてもらいます。世の中には貴女のような隠れたキラ星がやはり存在するのですネ。感動しました。

(札幌市 K.Kさん)

いつも、沢山の内容のある記事を、よく編集されていることに感心しています。いかにも継続は力、主婦でありながら、このように社会に目を向け、自分自身を絶えず育てている姿勢に敬意を表します。

忙しい日程の中で、山行、自然保護、読書、映画、すべてに充実した生き方を反映させるのも大きな努力なしにはできないと、誌面が語っています。(千葉市 H.Jさん)

すごいですね。山にどんどん登るだけでなく、排泄物運びまで。階段の上り下りにもあえぎ腰痛で悩み、右手の親指の曲げ伸ばしに困難をきたし、ちょっと座っているだけで、体がゴチゴチにこわばる私は情けなくなります。

ブログを始めました。まだあまり書いていませんし、まさに日記で発表するようなものではないのですが、忘れないうちに書き留めておこうというメモ代わりとして書き、公表しています。お暇があったらのぞいてみてください。コメントも歓迎です。

<http://plaza.rakuten.co.jp/solar08/>

どうぞ、これからもお元気でご活躍を。(フライブルク・今泉みね子さん)

今泉みね子さんはドイツ、フライブルクに住み環境ジャーナリストとして活躍。150号で「励ます弁当」を紹介しましたが「ミミズのカーロ」「森の幼稚園」「ここが違う、ドイツの環境政策」「ドイツ発、環境最新事情」など多数の著書があります。是非お読み頂けたらと思います。(みな子)



パソコンの通信を初めて見ましたが、カラー写真が鮮やかでびっくりしました。

私は8月に息子とふたりで18年ぶりにメキシコに行くことにしました。海外も7年ぶりなので、初心に返りパスポートの申請から始めています。(鎌倉市 O.Tさん)

とても素敵な通信だったので新鮮な気持ちで拝読してしまいました。これからも拝読してみたいと思います。(札幌市 M.Nさん)

## 9.9 小樽・赤岩で

毎回、主人と興味深く読ませていただいております。映画と本の情報はとっても楽しみです!(帯広市 S.Tさん)



9.6 赤く実ったコウライテンナンショウ



映画紹介

闇の子供たち

タイの子供の人身売買を追う

タイの子供の人身売買を追う、幼児売春、臓器売買のショッキングな現実に迫った社会派作品です。原作は梁石日「闇の子供たち」。バンコク駐在の新聞記者南部（江口洋介）は、日本の子供がタイで密かに心臓移植手術を受けるといふので調査を開始します。

大学で福祉を学んだ音羽恵子（宮崎あおい）がタイの社会福祉センターにボランティアとして参加。貧しくて学校に行けない子供たち

が字を学んだり、遊んだりできる施設ですが、少女の姿が数日来見えません。新聞記者の南部、音羽、それにちよつと頼りないカメラマン与田（妻夫木聡）が少女の行方を追ううちに、タイの子供たちがマフィアに監禁され、売春させられている事を知ります。この場面がショッキング。幼児買春のむごたらしさ、おぞましさに思わず目を背けてしまいました。客の中には日本人もいます。

少女たちはエイズになればゴミのように捨てられます。エイズになった少女がゴミ袋から必死に逃げ出して我が家にたどり着き、屋外の木の檻で息絶えるシーンに胸がふさがりました。南部と音羽は臓器移植手術を受ける子供の父親（佐藤浩市）に東京まで会いに行きます。音羽は、タイの生きた子供からの心臓移植手術は止めてと訴えます。南部と与田は病院前で張り込み、心臓移植される子供、移植する子供を見つめます。音羽もマフィアの暴力に敢然と立ち向かい、児童施設から消えた少女を救出する場面などハラハラさせられます。なすすべもなく大人のおもちゃにされる子供たちの眼差しがいつもでも心に残ります。

映画は子供の命の尊さを守ろうとする光と、子供を売買する闇との葛藤を描き、貧富の格差による厳しい現実を捉えています。闇の子供たちを救うには何が出来るのだろうか？と深く考えさせられました。

（樋口みな子）

購読料をありがとうございました  
08.8.4~9.23（敬称略）

東直美（札幌市）芳村宗雄（札幌市）  
新井貴美子（北広島市）安田成男（札幌市）  
小池修生（札幌市）沼崎勝洋（小樽市）  
熊沢静子（札幌市）カンパも含む  
海川敏雄（函館市）3,000円  
岩淵雅輝（江別市）3,000円  
カンパ佐々木孝雄（札幌市）2,000円  
合計18,000円は印刷と送料に使わせて頂きます。ありがとうございました。  
インターネットでも読めます。（無料です。メールアドレスをお知らせください。）  
<http://briefcase.yahoo.co.jp/bc/ginganews150>  
郵送を希望しない方、購読を中止する方はご連絡ください。



